

『やりたい盛りの性春トライアングル』

著：紫真 晶

ill：逆月酒乱

週末、指定された駅で降りると翔真が迎えに来ていた。渋谷や原宿で見かけるような流行のカジュアルな装いをさりげなく着こなしている。長身でスタイルがいいので、すぐにでも読者モデルにスカウトされそうだ。瑞希は翔真の私服姿のかわよさに、思わず見とれてしまった。

玲と幼馴染みの翔真の家も、この近くだという話を聞きながら玲の家に向かう。

閑静な住宅地の中でも、ひととき目を引く屋敷の門に入る。手入れのいい日本庭園が広がり、錦鯉の泳ぐ池もあるその豪華さに驚いた。玲の家は資産家だとは聞いていたが、これほどまでとは思わなかったのだ。

出迎えてくれた玲は、白のボタンダウンシャツに紺色のスキニーパンツがすっきりとさわやかな印象だ。

翔真は慣れた様子で階段を上っていき、玲の部屋のローソファの一角に陣取った。

机と本棚、大きなベッド、翔真がいるローソファの前には楕円形のガラステーブル。床に敷かれた絨毯はふかふかで気持ちいい。日当たりのいい、明るくて広い部屋だ。

「俺んちのリビングより広いや。さすが玲、部屋もきれいにしているんだね」

玲が、まあね、と苦笑し、ガラステーブルの向かい側に座ると山と積まれた参考書の一冊を広げる。さっそく勉強モードだ。

「ここ数年の問題傾向を調べてそこを重点的に勉強すれば、テストの平均点ラインなんて軽く超える」
とんでもないことをさらっと言い、数学の中間テストで瑞希が間違ったところを教え始めた。

玲の家庭教師ぶりは、やたらと厳しくて、キス未遂事件以来、玲が近くにいると感じてしまっていた別の意味での緊張など、あっという間にふっとんでしまった。

玲の教え方がうまいからか、三十分もすると、なんとか解き方を理解できるようになってきた。わかるとけっこう面白い。

「瑞希い、お前、けっこう真面目だな。どうしたんだよ」

側に座っていた翔真が肩を抱いて、もたれかかってくる。さっきからあちこち体を触ったりつついたりして悪戯していたのだが、いよいよ飽きたらしい。

「翔真、重たいよ。それ、やめて」

じゃれあってる場合じゃない。こっちは真剣に勉強してるんだ。

翔真がくくっと含み笑いをし、「それってどれだ？ これか？ こっちか？」と派手に胸や腹を撫で回してきた。

「もう～、翔真、じゃま。くすぐったい。ふざけるの、やめろよ」

そっけなく腕を振り払ったら、もっとじゃれついてくる。笑って抗っているうちに、ふいに首筋にあたたかく濡れたものを押しつけられて、びくっとした。

（何...？ 首にキスされた...？ うそお）

はぐらかすように、またこちょこちょとくすぐられる。

「お前、今何し...っ、ちよっ、あははっ、...っ、翔真っ、怒るぞ」

「怒るなよ、瑞希。可愛いがってるんだからさ」

息を呑んだ。腹をくすぐっていた手が狙いを定めたように股間を掴んだのだ。

「わ、バカ、やめろよ！」

焦って腰をよじったら、内に隠されている形を確かめるように、ますますしっかりと握り締めてくるのではないか。

なんてことを！と仰天し、翔真の体を押し退けようと抗う。

離れるどころか、反対にぎゅっと握られて上下に動かされて、快さに疼きが湧きあがる。

はあん、と言葉にならない声が洩れてしまった。その間も翔真の手は瑞希のものを弄っているのだ。

「ふざけるのもいいかげんにっ、……あ…っ…」

翔真がのしかかってきて、床に押し倒されてしまう。さすがにぎょっとした。

(急にどうしたんだ？なんでやめないんだ。何考えているんだよっ)

いつもなら、瑞希が本気で嫌がればすぐにやめるのに。しかも胸の上に乗った翔真の体がひどく重くてどうにも動けないときている。

翔真の脚に挟まれて、両腕も脇腹に押さえつけられているせいで、押しのけることもできない。そんな状況で、硬いデニム地越しに揉まれ続け、ズクン、と男根が疼いた。自身が脈打って硬度を持ったことにぶるっと震えが走る。

あ、やだもうっ、……どうしよ…気持ちいい……。

揉まれて硬くなったこととそれを快く感じてしまったことに狼狽えて、固まってしまう。腰に快感が集中し、握った手に反発するように、男根がドクン、ドクン、と脈打っていくのがわかる。

無理矢理に弄られているのにこんなふう反応してしまったのが、たまらなく恥ずかしくて涙が出そうだった。

「翔真！ やらしいぞ。…う、もう、やめろっ、…よお…」

「やめてほしいか？」

思いがけない優しい声に、すがりつくようにこくこくと頷く。

「……や、め、な、い」

耳たぶを熱い息で湿らせ、翔真が悪戯っぽく区切ってささやいた。

「翔真、何ふざけて…っ」

とっさに顔を振って唇を避けた。熱い感触があごをかすめたのがわかり、瑞希はキッと翔真を睨みつけた。

「やめろ！ 俺の唇はミチルちゃんのものだ」

「そうか。悪いなあ、お前の唇は、今は俺のものなんだよ」

その時、ゴホンと咳払いが聞こえ、瑞希はハッとして玲の姿を探した。

翔真をなんとかしてくれ、と目で訴える。

同時に玲を見た翔真は、ちっと舌打ちした。

「言い直す。お前は、今は俺と玲のものだ」

(…え？ それ、どういう…、っ！)

唇が熱いもので塞がれる。驚き、キスされたのだと悟って瑞希は猛烈に暴れた。…つもりだったが、実際は翔真の下で体をくねらせただけだった。

(うそお！ マジでキスされてる…っ、…俺の初キスがああ…！ 男相手だなんて…)

濡れたものが噛み締めた唇を押してくる。頑張っ逆らったが、何度も押し揉みされ、強引に合わせ目をなぞられるうちに、とうとう負けて侵入を許してしまった。

(…！ これ…、もしかして……)

口の中に入ってうごめき始めたものが舌だと知って仰天する。さっきから呼吸の仕方がわからず息ができないところに舌まで吸われ、苦しくて頭がくらくらしてきた。

バツといきなり唇が離れる。

「まったく油断も隙もないな」

「これくらい権利があってもいいんじゃないの？ 一番は譲るんだからさ」

玲が翔真の肩を掴んで引き離したのだ。

うるっときて、瑞希は上体を起こすなり玲に抱きついてた。

「玲一、こいつ、ヘンだぞ。いやらしいっ」

泣きそうな顔で訴えた瑞希の背をさすって、まあまあとなだめ、玲は瑞希を抱いたままベッドに誘導する。

「俺が悪役をやってやった分、高くつくぜ」

玲にこそっと言った翔真の声は、助かったと安堵していた瑞希の耳には入らなかった。

翔真から離れようと、ますますぎゅっとしがみつくばかりだ。

「よしよし。そんなにビクつかなくてもいい。翔真は前から瑞希に抱きついたりしてたじゃないか。ちょっとふざけすぎただけさ」

「...う、.....ん...」

違う...と思うけれど、玲が言うならそうなのかもしれない。これくらいのことで狼狽えて、泣きそうになったのが気恥しくなってきた。

ベッドの上に座っていた瑞希の体がゆっくりと押し倒されていく。とさっと背中がついてから瑞希は不思議な気持ちで、顔を覗き込んできた玲を見つめた。

「僕が怖い？」

「...ううん.....」

というか、ドキドキする。頬を赤らめた瑞希の耳元に玲が顔を寄せてきた。

「キスしてもいい？」

(...！何言ってるんだよ、玲まで)

急にバクバクッと心臓が高鳴った。だめなのに、だめと言えなくて視線が揺れる。

「そうだ。その前に愛の言葉を言わなくちゃね」

「...愛の言葉？ なんだよ、それ」

悪戯っぽい笑みにほっとして瑞希も笑った。冗談かな？ でもなんだか嬉しい気がする。

「前から瑞希が気になっていた。瑞希が好きだ。僕にとって瑞希は特別なんだ。だから...」

「.....。俺は男だぞ。女じゃない」

「キスしたいし、抱きたい。そう思うのは瑞希だけだ」

とくん...と胸がときめいて狼狽えた。余裕のある笑みにたじたじになってしまう。

「そんなこと.....、ああ、きっと男子校だから、俺を可愛いと勘違いしているんじゃない」

「べつに勘違いなどしていない。それで？」

瑞希は何か言わなくてはと、必至に言葉を探すが頭の中は真っ白になっていく。

「えーと、えーと、...そうだ。俺なんかより翔真のほうがいいじゃないか！ かつこいいし、つきあい長いし、幼馴染みなんだろう？」

翔真がぷっと噴き出した声が聞こえたが、この際、無視する。

「論外だ。言っただろう？ 瑞希だけだって」

玲がメガネをはずして、ベッド横にあるサイドテーブルの上に置いた。睫毛の長い、きれいな顔に息を

呑む。

「...う...うん、.....でも、...あの、その.....」

「もう黙れ」

先日は、触れることのなかった唇と唇がしっかりと重なる。あたたかく、柔らかな感触にぴくっと身じろぐと唇はすぐに離れた。

「ちゃんと息、できたか？」

「...う、わかんない.....」

あまりに短すぎて。

「じゃ、もう一度しよう」

唇をしっかりと塞がれる。舌先に促されるまま、自然に唇を開いていた。

(俺、今キスしてるんだ、玲と。こんなキスなら、いいかも...)

静かに入りこんできた舌に神経が集中する。名残惜しそうに唇が離されるまで。

「息できたよ！ 玲のキスと翔真のキスは全然違うね。玲のキス、優しかった」

うまくできたのが嬉しくて、瑞希は目を輝かせて正直な感想を言う。玲がああ夢見るような眼差しで見つめ、微笑むと、また口づけてくる。

(あ.....)

鼓動がきゅんと跳ねた。舌が慎重に舌に触れ、つついて誘い、絡めてねっとり吸う。

息ができるのになんだか苦しいみたいに胸がいっぱいになり、瑞希は我を忘れてしまった。吸い返すと、もっと深く舌が入り込んできてうごめき、口と口が繋がっていることが感じられてうっとりする。魂が吸いだされていくかのようにぼうっとして、頭も体も熱くなっていく。

チュッ、チュッ、と唇を啄まれ、目を閉じたままずっと笑う。気持ちいい....。

「瑞希...？」

ひそめた声の色っぽい響きにぞくっとし、瑞希は玲にしがみついた。

玲の手がシャツをまさぐりだし、くすぐったくてドキドキする刺激をもたらす。

掌がジーンズの腰にかかった。そのままもぐりこもうとする。

(...あ！そこ、っ.....)

驚いて首を振った。唇が、チュッと耳たぶを吸ってささやく。

「瑞希に触りたいな、...だめ？」

もちろんだめだ。でも、今度もだめと言えず、反対にカーツと顔が赤くなっていく。手がボタンをかけたままのきついウエストから中へ滑り込んだ。下着のゴム部分までくぐってしまう。

わあ！と頭の中で叫んでギュッと玲の両腕を掴んだ。そんなことでは玲を止められず、さりさりと茂みをかき回されてしまう。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>